

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

質疑応答報告

著者	法政哲学編集委員会
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	2
ページ	99-101
発行年	2006-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/7115

濱田義文先生追悼シンポジウム

質疑応答報告

四人の提題者の発表後、提題者の間での発表についての補足的な質疑応答があり、その後フロアーよりいくつかの質問があった。濱田義文先生との交流や学恩についての追憶、感想等もよせられたが、以下では学問的なテーマに限って内容をまとめた。

「世界市民」をめぐる

まず加来彰俊先生より、同僚であった濱田先生についての追憶、またその哲学的な業績についての感想などが述べられたが、とくに発表内容について、小野原雅夫氏の発表のなかで使われていた「世界市民」という表現についての質問がよせられた。世界市民という言葉は、ヘレニズム時代以来ネガティブな意味で使われてきており、また現代においても、有意義な政治概念であるかについては疑問があるが、この点について小野原氏はどのように考えるか、というのがその主旨であった。これに対し小野原氏は、カン

トおよび濱田義文先生においても、「世界市民」という概念にはさまざまな問題が含まれていることを断ったうえで、濱田先生の『カント読本』に所収の論文からの引用によって応えた。世界市民とは、世界を股にかける国際人を意味するコスモポリタンではない、むしろ、この語は、「地上の特定の場所に限定されぬ、理念としての普遍的人類社会の成員として振る舞う者」である。このような世界市民解釈こそが、濱田先生らしい解釈だと言えるのではないかとした。

さらに、牧野英二氏が次のように補足した。昨年出版されたU・ベックの著作によれば、「世界市民（「コスモポリタン」）の語には、二〇世紀において、とくにナチス・ドイツにおいては、ユダヤ人のことが念頭におかれ、また旧ソ連の時代にあつても類似した意味が、つまりその人間を地上から抹殺するに値するといった意味が与えられていた。このような軽蔑的な意味は、カントの時代にあつても同様であつた。しかし逆に、カントと同様にポジティブな意味

で用いられる場合もあった、とのことであつた。

カントのプラトン理解

次に奥田和夫氏より、カントのプラトン理解についてコメントがよせられた。奥田氏によれば、カントのプラトン理解の中心は、プラトン中期の超越論的なイデアの思想を高く評価する点にあるが、さらに、カントが『ティマイオス』を典拠とする考え方に賛同を示し、また、イデアの流出説、すなわち新プラトン派につながるようなイデア理解も示している、とのことであつた。これに関連してフロアーの他の会員から、カントはプラトンについて、何によって知識を得たのかという別の質問がよせられた。これに対する提題者からの回答は、カントの同時代においては、例えばM・メンデルスゾーンに代表されるように、古代ギリシアの思想に直接向かう動きが見られ、カントもその中にいるが、また、カントは当時の哲学史の教科書（ex プルツカー『Jakob Brucker, 1696-1770』『哲学史綱要 *Institutiones Historiae Philosophicae*』〔一七四七年、第二版一七五六年〕）にも依拠しているのではないか、というものであつた。

カントとヒュームと濱田先生

さらに中釜浩一氏から、因果論に関してカントはヒュー

ムの問いに対して本当に答えているのか、またそれについて濱田先生はどのように考えていたのか、という質問がよせられた。これについては、牧野氏から次のような回答が得られた。ヒュームの因果性の分析によって「独断のまどろみ」から目覚めたカントは、ヒュームを尊敬していたことは間違いない。そしてまた濱田先生にとっても、ヒュームは尊敬すべき存在であつた。ただしさらに立ち入れば、ヒュームが問題にしていたのは個別因果性の問題であつたのに対し、カントは、一つには自然の世界の法則的な基礎づけを問題にしていた。さらに、絶対的自発性を媒介にした自由による因果性も、カントにとっての問題であつた、ということが言える。そして濱田先生ご自身が行おうとしていたのは、この自由による因果性の原理を用いて、道徳法則による市民社会の秩序づけの問題へ向かうことであり、善意志と法の哲学への道へと向かうことであつたのではないか、とのことであつた。

カント解釈をめぐる和辻哲郎と濱田先生

最後に、伊藤直樹氏から、カント解釈をめぐる和辻哲郎と濱田先生との相違について質問があつた。これについては、笠原賢介氏より次のような回答が得られた。濱田先生は、『カント事典』に執筆された和辻哲郎の項で、和辻の『人格と人類性』について評価されている。しかし、和辻

は、そこから和辻倫理学の方へと行った。他方、濱田先生は、カントに向かわれたが、同時にヨーロッパの動乱期である十六―十七世紀の思想、モンテーニュ、ホッブズ、ラ・ロシュフーコー、パスカルへの関心もお持ちであった。そしてこの関心が、濱田先生のカント研究の背景としてあるはずである。戦後の和辻は、『鎖国』において十五―十六世紀のヨーロッパに向かつていったが、濱田先生の関心とは微妙かつ決定的にずれている。この点が、和辻と濱田先生の思想的営み（研究）をとらえる際に考慮すべき要点である、とのことであった。

（文責 編集委員会）